

知的障害のある個人の当事者参画と「できる」の拡大

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
鳥取 直子

本研究は、障害のある個人の当事者参画及び正の強化で維持される行動の選択肢の拡大に向けた支援のあり方について検討したものである。研究においては、活動を行う上で適応的でかつ新しい行動を「できる」とした。研究参加者は知的障害のある当事者二名で、余暇場面及び職場実習場面の二つの場面において研究を実施した。援助設定として、対象者が自身の活動内容を決定する機会を設けた。また決定した活動を実施する中で「できる」が見出された時には、理由とともに賞賛した。どちらの場面においても、対象者が自ら実施すると決定した活動を実施しないことがあった。そこで対象者がさらに正の強化を受けられる機会を設定するため、対象者が決定する内容を変更した。

研究の結果、対象者は自身の活動を決定することができ、「できる」も拡大した。また援助設定変更後には、活動の種類及び自発的な活動の開始が増加した。そして研究場面以外においても新しい行動が確認された。

本研究における当事者参画とは、支援者が設定した選択肢の中から何かを決定することではなく、何を決定するかをも当事者と支援者の相互のやりとりの中で決定することであった。また当事者が参画して自身のことを決めること、「できる」を拡大することのどちらにおいても、当事者が正の強化を受けやすい環境を保障することが必要であった。そしてその環境は、支援者と当事者との相互のやり取りの中で作られていくものであることが示唆された。